

7
0
0
1
ク



魔法の因果関係

プロローグ

「はあ、はあ……」

現在俺、河川敷を疾走中。

久しぶりに走ったから、足がもつれるわ、酸素が足りないわで散々な状況だ。

「待ってください！ お礼がしたいんです」

この状況を作り出した張本人の声が後ろから聞こえる。

名前は知らないが、見た感じからすると同年代か少し年下の少女のようである物を握り締めながら俺を追いかけてきていた。

「だからいらないって言ってるだろ！」

なぜこんな状況になっているかと言うと、

元をたどれば原因は俺にあるのだろう。

川の前で涙を流しながら座っていた少女に、

たまたま気が向いて、たまたま声をかけただけ

特に何か言ったわけでもないのだが、慰めてくれようとしたお礼と称しとある物体を俺に授与しようと、そういう事になったのだ。

今思えば、頬を赤らめながら、

ちょっと後ろを向いてくださいと言われた時に

何かおかしいと思うべきだった。

振り向きの許可が下り、少女の方を確認すると

おそらくはお礼ということなのだろう、

右手には先ほどなかったその物体が握られていた。

左手で前髪を触りながらうつ向き加減で

それを俺の視線の先に差しだして一言

「これ、受け取ってください。その……お礼です」

差し出されたそれはどう見てもアレにしか見えない

肌触りの良さそうな白色の布切れで、手の大きい人なら握れば拳の中に収まるであろうそれはお礼としてもらうには一般的ではなく、男が手にするには抵抗がある物

せっかくお礼として提示してくれたので、受け取ろうかと思ってしまったが受け取った後のことを考えてみるとリスクが高すぎた。

仮に俺があれを受け取って、そのことが周りに知れたらどうなるか彼女持ちでない俺にとってそれは死亡フラグと同然。

そもそも、周りに鞆などが無いことを考えるとあの布切れは身につけていたはずのものであって受け取るにはそのことも受け止めてしまわないといけないことになる。

だから、それは断固として受け取るわけには行かなかった

「なんで逃げるんですか！」

「追いかけてくるからだろ！」

「これをっ、これを受け取ってくれるだけでいいんです！」

「う、うけとれるか！ そんなもん！」

そう、受け取るわけにはいかない
あんなもの、紳士の俺には必要ないのだ。

「なんで！ ただの脱ぎたてパンツですよ！」

「それがダメだって言ってんだよ！」

少女の脱ぎたてパンツなんてさ
特殊な性癖の持ち主でないとプレゼントにならないよな？

なんでこんなことになったのか
ほんとについてないよ俺……。